

コリマ・ユカギール語における疑問語疑問文*

長崎郁

1 はじめに

コリマ・ユカギール語¹の主節の動詞はいくつかの例外的な場合をのぞき、定動詞形となる。定動詞の末尾に現われ、主語の人称・数を標示する人称接辞は直説法、命令法、疑問法という3つの法にしたがってパラダイムをなし、このうち疑問法の人称接辞はもっぱら疑問語疑問文で用いられる。

- (1) *tet qanin kelu-k?*
2SG いつ 来る-INTERR.2SG
「あなたはいつ来たのか？」

本稿ではまず、コリマ・ユカギール語の疑問語疑問文の形成について概観し、この言語の疑問法人称接辞の使用が通言語的に珍しい現象であることを述べる。次に、疑問語疑問文が間接疑問節的に用いられる用例を整理・分類し、各タイプの特徴を指摘する。

2 疑問語疑問文の形成

2.1 疑問語

コリマ・ユカギール語の疑問語を意味的カテゴリーと共に表1に示す。表1に見るように、疑問語は名詞、副詞、限定詞²、動詞と、複数の語彙カテゴリーにまたがって分布す

* 本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」第3回研究発表会での口頭発表に加筆・修正したものである。

¹ コリマ・ユカギール語は北東シベリアを流れるコリマ川の上流域とその支流で話される言語であり、より北方に分布するツンドラ・ユカギール語とともにユカギール語（語族）をなす。ユカギール語の系統関係は分かっておらず、一般には孤立言語とされる。ただし、ウラル諸語との同系説が1940年代から議論されている。2010年のロシア連邦の調査によるユカギール人の人口は1603人、そのうちユカギール語の話者数は350人である。また、ソ連時代のユカギール語研究の第一人者であったクレイノービッチは、1980年代のユカギール語話者数として、コリマ・ユカギール語50人、ツンドラ・ユカギール語150人という数をあげている（Krejnovich 1900）。

本稿で用いるデータには、(A) ロシア、マガダン州セイムチャン村およびコリムスコエ村、サハ共和国ネレムノエ村での筆者自身の調査で得られた資料、(B) 刊行されたテキスト資料（Nikolaeva 1989 (I, II)）が含まれる。(B) からの引用の際には出典を示す。引用におけるグロス語は筆者によるものである。音素目録は次のとおり：/p, t, ʃ, tʃ, k, q, b, d, ʒ, dʒ, g, ɤ, r, m, n, nʲ, ŋ, l, lʲ, w, j, i, e, a, o, u, ø/。表記は基本的に音素表記を用いるが、ロシア語からの借用語にはキリル文字をラテン文字に転写して用いることもある。

² 語幹のままでもっぱら名詞修飾機能をもつものを、限定詞と呼んでおく。

る。

表1 コリマ・ユカギール語の疑問語

意味的カテゴリー	疑問語【語彙カテゴリー】
人	<i>kin</i> 【名詞】「誰」
もの・事柄・場所	<i>leme~neme</i> 【名詞】「何」、 <i>qadi~qadun</i> 【名詞】「どれ・どこ（範囲がわかっている場合?）」
場所	<i>qon</i> 【副詞】「どこで・どこに」、 <i>qot</i> 【副詞】「どこから」、 <i>qajide</i> 【副詞】「どこへ」
時点	<i>qanin</i> 【副詞】「いつ」
原因・理由・目的	<i>godit</i> 【副詞】「なぜ」、 <i>noŋoon</i> 【副詞】「何のために」
様態・手段・方法	<i>qodo~qode</i> 【副詞】「どのように」、 <i>godimie-</i> 【動詞・限定詞】「どのようなである・どのような」、 <i>numun</i> 【副詞】「何で・どうやって」
数量	<i>qamun</i> 【限定詞】「いくつの」、 <i>qamloo-</i> 【動詞】「いくつである」、 <i>qamlid'e</i> 【副詞】「何度」
発言内容	<i>monokod-</i> 【動詞】「何と言う」

疑問語は、不定を表す場合および全部否定を表す場合に平叙文でも用いられる。不定を表す場合には、接語=*de* または=*ere* を伴うことが多いが、疑問語単独で現れることもある(2)-(4)。全部否定を表す場合には、接語 *n'e=* を伴い、否定の意味をもつ述語と共起する(5)³。

- (2) *taa leme=de pod'ond'i-j.*
あそこで 何=CLT 光る-IND.INTR.3
「あそこで何か光っている」
- (3) *godimie=ere mieste-ge jaqa-jiili.*
どのような=CLT 場所-LOC 着く-IND.INTR.1PL
「(わたしたちは) どこかの場所に着いた」
- (4) *mon-do-ko qadun-get qadun-get kie-t' momufaa.*
言う-POSS.3-LOC どこ-ABL どこ-ABL 来る-IND.INTR.3 モムシャー
「(かれがそのように) 言うと、どこからかどこからかやって来た、モムシャー (魚の名前) が」

³ これらの接語のうち、=*de* および=*ere* はサハ語からの借用の可能性がある (江畑 2007)。また、*n'e=* はロシア語からの借用と考えられる。

- (5) *tamun ijer n'e=leme øjl'e.*
 それ ほかに CLT=何 ない
 「そのほかには何もない」

2.2 疑問法人称接辞

定動詞の人称接辞の3つのパラダイム（直説法、命令法、疑問法）のうち、疑問法の人称接辞はもっぱら疑問語疑問文で用いられる。以下の(6)は動詞が直説法の人称接辞をとった平叙文、(7)は疑問法の人称接辞をとった疑問語疑問文である。一方、(8)に見るように、肯否疑問文に現れる定動詞は平叙文と同様に直説法の人称接辞をとり、疑問法の人称接辞をとることはない⁴。

- (6) *met tet-in ejmef-u-t.*
 1SG 2SG-DAT 支払う -E-FUT:IND.TR.1SG
 「わたしはあなたにお礼をしよう」

- (7) *neme-le ejmef-te-m?*
 何-INS 支払う -FUT-INTERR.1SG
 「(わたしは) 何でお礼をしようか？」

- (8) *met tet-in ejmef-u-t?*
 1SG 2SG-DAT 支払う -E-FUT:IND.TR.1SG
 「わたしはあなたにお礼をしようか？」

また、肯否疑問文は文末に接語 =*duu*⁵ を伴うことがあるが、この疑問接語は疑問語疑問文に現れることはない⁶。

⁴ なお、肯否疑問文・疑問語疑問文に関わらず、疑問文の形成では語順の変更などの統語的操作はなされない。また、筆者の聴覚印象では、肯否疑問文のイントネーションは文末上昇調にはならず、真偽値を問う語のアクセント音節 ((i)と(ii)のボールド体部分) でピッチが上がる。疑問語疑問文でも疑問語のアクセント音節でピッチの上昇が観察されることがあるが、義務的ではないようである。

- (i) *tet t'aaǰ ooǰe-t-mek?*
 2SG お茶 飲む -FUT-IND.TR.2SG
 「あなたはお茶を飲みますか？」
- (ii) *tit uør-pe tit-ke modo-ǰi? tet-id'ie modo-ǰok tet?*
 2PL 子供-PL 2PL-LOC 暮らす-PL:IND.INTR.3 2SG-1 人で 暮らす-IND.INTR.2SG 2SG
 「あなたたち子供たちは、あなたたちのところで暮らしているのか？ 1人で暮らしているのか、あなたは？」

⁵ 疑問接語 =*duu* はサハ語からの借用と考えられる。江畑 (2007: 21) によると、サハ語の接語 =*duu* は選択疑問、反問に用いられるという。

⁶ 例外的に「A か、何か」のような列挙において疑問語と =*duu* が共起することがある。

- (iii) ... *irkin t'uge-k=duu lem-dik=duu? ...*
 1つの 道-PRED=Q 何-PRED=Q

(9) *jowl'-aa-jemet=duu?*

病気である-INCH-IND.INTR.2PL=Q

「(お前たちは) 病気になったのかい？」

このように、疑問文であることを示す形態・統語的な方法が肯否疑問文と疑問語疑問文ではっきりと分かれていることがコリマ・ユカギール語の特徴であると言える。

ただし、疑問法人称接辞の使用は1人称をのぞき義務的ではなく、2人称、3人称を主語とする疑問語疑問文では疑問法と直説法のどちらの人称接辞も現われうる(10)、(11)。疑問法人称接辞の使用が義務的か否かに人称による違いがあることは、Maslova (2003: 481) がすでに指摘しているが、筆者の聞き取り調査でも同じ結果が得られている。なお、コンサルタントによると、疑問法の疑問語疑問文と直説法の疑問語疑問文の間には意味的な違いは認められないという。

(10) a. *tet qanin kelu-k?*

2SG いつ 来る-INTERR.2SG

「あなたはいつ来たのか？」

b. *tet qanin kie-t'ek?*

2SG いつ 来る-IND.INTR.2SG

「あなたはいつ来たのか？」

(11) a. *kin nume-le aa?*

誰 家-INS つくる:INTERR.3

「誰が家を建てたのか？」

b. *kin met-kele edief-u-m?*

誰 1SG-ACC 呼ぶ-E-IND.TR.3

「誰がわたしを呼んでいるのだろうか？」

Siemund (2001: 1017)、König and Siemund (2007: 299)、Dixon (2012: 385-389) による疑問文に関する類型論的研究では、特有のイントネーション、疑問小詞、語順の変更、特別の動詞屈折形式など、疑問文の標示に用いられるいくつかの方法の中で、疑問文専用の動詞屈折形式をもつ言語はそれほど多くないと述べられている⁷。また、ある言語がそのような動詞屈折形式をもつ場合にも、肯否疑問文のみで用いられる、あるいは肯否疑問文

「...、道だったか何だったか、...」

⁷ Siemund (2001)、König and Siemund (2007) は、疑問語疑問文専用の動詞屈折形式をもつ言語として、西グリーンランド(カラーリット)語などのエスキモー諸語を、Dixon (2012) はさらに、モンゴル語、トンカワ語、タリアナ語、ジャラワラ語をあげている。

では義務的だが疑問語疑問文では任意的に用いられるなど、その使用は肯否疑問文に偏るとされる。コリマ・ユカギール語の疑問法人称接辞が疑問語疑問文でしか用いられないということは、このような指摘に対する反例であり、通言語的に極めて珍しい現象であると考えられる。

2.3 疑問法人称接辞を用いない疑問語疑問文

疑問語疑問文であっても、疑問法の人称接辞が決して現れない場合がある。[1] 名詞述語文の述語として疑問語が現れるとき、[2] 自動詞主語または他動詞目的語に疑問語が現れるとき、の2つの場合である。

[1] 名詞述語文の述語として疑問語が現れる場合

名詞述語文では名詞述語が述語接辞を伴って現れるが、疑問語が述語位置にたつ場合にも、同様に述語接辞をとる。

(12) *tittel kin-tek?*

3PL 誰-PRED

「かれらは誰か？」

[2] 自動詞主語または他動詞目的語に疑問語が現れる場合

自動詞主語または他動詞目的語に疑問語が現れる場合は、それを焦点化した構文（焦点構文）が義務的に用いられる。焦点構文では焦点化された疑問語が名詞述語と同じ述語接辞をとり、それと同時に動詞が連体修飾機能をもつ形式（自動詞は動作名詞形（action nominal）、他動詞は受動修飾形（passive attributive））となる。

(13) *kin-tek kelu-l?*

誰-PRED 来る-AN

「誰が来たのか？」

(14) *tudel lem-dik aat'ii-mele?*

3SG 何-PRED 引っ張る-PA.3

「かれは何を引っ張っているのか？」

3 疑問語疑問文の間接疑問節的な使用

疑問語疑問文が隣接する節の動詞と統語的あるいは意味的に結びついた構造を、本稿では間接疑問節と呼ぶことにする。間接疑問節の構造は、(1) 名詞化タイプ、(2) 並置タイプ、(3) 相関タイプの3つに分類することができる。

3.1 名詞化タイプ

間接疑問節が名詞化され、補文節として節に埋め込まれた例が見られる。以下、(15)は間接疑問説が対格 (-gele~kele) をとって目的語となった例、(16)は主格 (明示的な格接辞をもたない) をとって主語となった例である⁸。ただし、資料における名詞化タイプの例は、残る2つのタイプに比べて少ない。

- (15) *taa jaqa-delle, t'umu pundu-m, [qodo gude-l'el]-gele.*
 そこに 着く-CVB.SEQ すべて 話す-IND.TR.3 どのように なる-INFR(-AN)-ACC
 「(かれは) そこに着いてからすべて話した、どうなったかを」
 (Nikolaeva 1989 (I) : 42)

- (16) *ønme-ge jaqa-te-j, [noŋoon ejre-t tet joŋz-ool].*
 思考-LOC 着く-FUT-IND.INTR.3 なぜ 歩く-CVB 2SG 忘れる-RN
 「(わたしには) 分かるだろう、なぜ歩きまわってあなたが (わたしを) 忘れてしまったのかが」 (Nikolaeva 1989 (II) : 52)

3.2 並置タイプ

間接疑問節は、直接疑問と変わらない構造で発話を表す動詞 (*mon-*「言う」、*ørn'e-*「叫ぶ」、*nied'i-*「話す」、*pundu-*「話す」、*jowlut'-*「尋ねる」など)、思考を表す動詞 (*t'uŋze ejref-/ønme ejref-/ønme uu-*「考える (いずれも直訳は「思考を動かす)」)、知識・知識の獲得や喪失を表す動詞 (*lejdii-*「知っている」、*joŋro-*「忘れる」、*ønme-ge jaqa-*「分かる (直訳：思考に着く)」、*nug-*「見つける・つきとめる」、*juø-*「見る・調べる」など) を述語とする節と並置されることがある。名詞化タイプと異なり、間接疑問節がこれらの動詞のとり補文節であると分析しうる形態・統語的な標示はない。間接疑問節は、もうひとつの節の後に来ることが多いが、前に来た例も見られる。以下の例に見るように、並置された間接疑問節は直接引用的性格を示し、人称などの直示語が発話者の視点から表現し直されることはほぼない⁹。また、(18)のように、間接疑問節の後に動詞 *mon-*「言う」の副動詞形 *mon-u-t*「言っ」が伴われることがある。この *mon-u-t* は、引用マーカ―の機能を果たしていると考えられる。

⁸ 以下、間接疑問節をブラケットで囲って示す。

⁹ 間接疑問節の主語の人称が発話者の視点により調整された間接引用的な例もわずかに見出される。

- (iv) [*qajide qon, qodo qon, qamun kind'e-ge qon,*
 どこへ 行く:INTERR.3 どのように 行く:INTERR.3 いくつの 月-LOC 行く:INTERR.3
el=lejdii.
 NEG=知っている:IND.INTR.3
 「(自分が) どこへ行ったのか、どのように行ったのか、何ヶ月行ったのか、(かれは) 分からなかった」 (Nikolaeva 1989 (I) : 102)

- (17) [*monokot-t'ok*], *mon-i*.
 何と言う-IND.INTR.2SG 言う-IND.INTR.3
 「(お前は) 何と言ったのか、(かれは) 言った」
- (18) [*qadun-ge l'e*], *mon-u-t* *joulos'-u-m* *tude* *nume-get*.
 どこ-LOC いる:INTERR.3 言う-E-CVB 尋ねる-E-IND.TR.3 3SG:GEN 家-ABL
 「(あいつは) どこにいるのか、と (かれは) 尋ねた、自分の家に」
 (Nikolaeva 1989 (I) : 100)
- (19) *taat modo-t* *ønme-de-ge* *jaqa-l'el* [*qodo tiit*
 そして 座っている-CVB 思考-POSS.3-LOC 着く-INFR どのように ここから
kebej-te-m].
 去る-FUT-INTERR.1SG
 「そして (かれは) 座っていて、理解した、ここからどうやって (わたしは) 出発
 しようか」 (Nikolaeva 1989 (I) : 96)
- (20) *terikee, ukej-k, føgii anil'-gi* *jokodaj-delle, juø-k, [lem-dik*
 妻 出る-IMP.2 袋 口-POSS.3 開ける-CVB.SEQ 見る-IMP.2 何-PRED
l'e-l].
 ある-AN
 「妻よ、外へでろ、袋の口を開けて見ろ、何があるか」 (Nikolaeva 1989 (I) : 66)

3.3 相関タイプ

間接疑問節が並置タイプと同様に直接疑問と変わらない構造をとると同時に、隣接する節に疑問語を受ける指示語が現れることがある。これは、一般に相関構文 (corelative construction) と呼ばれ、疑問語を含む節が関係節の、あるいは関係節と類似の機能を果たすとされる構文 (Keenan (1985: 163)、Andrews (2007 : 215)、Dixon (2010 : 356)) に相当する。Maslova (2003) は、コリマ・ユカギール語のこの種の構文をロシア語からの影響によりコリマ・ユカギール語に生じたものと見なしているが、他言語との接触だとしても、エウエン語 (ツングース諸語) あるいはサハ語 (チュルク諸語) といった他の周辺言語からの影響の可能性も排除することはできないであろう¹⁰。

相関タイプでは、間接疑問節がもうひとつの節の前に現れることが多く、また、発話、思考、知識の獲得・喪失を表すものに限らず、さまざまな動詞と結びつくことから、用いられうる動詞に意味的な制約はないと考えられる。一方、表 1 に挙げたすべての疑問語がこのタイプで用いることができるかはさらに調査が必要である。以下、疑問語と指示語の

¹⁰ 相関構文はツングース諸語、トルコ語、モンゴル語などアルタイ諸言語全般に広がっていることが報告されている (津曲 1996、風間 2003, 白 2012)。

対応関係毎に例を示す。

- 疑問語 *kin* 「誰」、*leme*~*neme* 「何」、*qadi*~*qadun* 「どれ・どこ」、*qajide* 「どこへ」と、指示語 *tabun*~*tamun* の対応

(21) [*kin-tek mon-u-l*] *tamun met sam el=lejdi-j*,
誰-PRED 言う-E-AN それ 1SG 自身(Rus.) NEG=知っている-IND.INTR.1SG
jojro.

忘れる:IND.TR.1SG

「誰が言ったか、それを私自身知らない、忘れた」

(22) [*tet-in nem-dik nadojoo-l*] *tamun met-ken azuu jan-mek.*
2SG-DAT 何-PRED 必要だ-AN それ 1SG-PROL 言葉 送る-IND.TR.2SG

「お前に何が必要か、それをわたしを通じて伝えるがいい」

(Nikolaeva 1989 (I) : 72)

(23) [*unuj-ge t'ande qadi-k kebej-l*] *tabud-ek anabuskaa-ŋoon aa-mele.*
川-LOC 上へ どれ-PRED 去る-AN それ-PRED 丸木舟-ESS 作る-PA.3

「(かれは2本の木を切り、その切屑を川へ投げて) 川の上流へ、どちらが流れていくか、それで丸木舟を作った」

(24) *mezze-t okoo-l'el, [qajide taŋ marqil' fubeze-j], tabun*
聞く-CVB 立っている-INFR どこへ その 娘 走る-IND.INTR.3 それ
mezze-t.

聞く-CVB

「(かれは) 耳をすましながら立っていた、どこへその娘が走って行ったか、それに耳をすましながら」

- 疑問語 *qajide* 「どこへ」、*qadun-get* 「どこから」と、指示語 *taŋide* 「そこへ」の対応

(25) *met tetul taa joq-to-t tet gorod-ke,*
1SG 2SG-ACC そこで 着く-CAUS-FUT:IND.TR.1SG 2SG 町(Rus.)-LOC

[*qajide qon-d'ok*] *taŋide.*

どこへ 行く-IND.INTR.2SG そこへ

「わたしはお前を送り届けようお前の町へ、どこへ(お前が) 行くか、そこへ」

(26) [*qadun-get kelu-k*] *taŋide kebej-k.*
どこ-ABL 来る-INTERR.2SG そこへ 去る-IMP.2

「どこから(お前が) 来たか、そこへ去れ」(Nikolaeva 1989 (I) : 62)

- 疑問語 *qodo* 「どのように」と、指示語 *taat* 「そのように」の対応

(27) [*qodo kelu-m*], *taat kebej-te-je!*

どのように 来る-INTERR.1SG そのように 去る-FUT-IND.INTR.1SG

「どのように (わたしが) 来たか、そのように (わたしは) 去ろう」

(Nikolaeva 1989 (II) : 28)

4 まとめ

肯否疑問文と疑問語疑問文という2種類の疑問文は、確認要求と情報要求という機能的な違いをもつとされる。コリマ・ユカギール語の疑問文の特質は、この2つの疑問文が疑問語の有無以外にも、形態統語的にはっきりと区別されることである。その区別のための主要な手段が、疑問語疑問文専用の疑問法人称接辞である。直接疑問における疑問語疑問文の構造は、基本的に間接疑問節として疑問語疑問文が現れる際にも保持され、直接引用的な用法から、相関構文という関係節の一種とも分析しうる用法へと広がっている。

略号

-	接辞境界	INFR	推量
=	接語境界	INS	具格
1,2,3	1人称, 2人称, 3人称	INTERR	疑問法
ABL	奪格	INTR	自動詞
ACC	対格	LOC	所格
AN	動作名詞形	NEG	否定
CAUS	使役	PA	受動修飾形
CLT	接語	PL	複数
CVB	副動詞	POSS	所有者
DAT	与格	PRED	述語
E	挿入音	PROL	沿格
ESS	様格	Q	疑問
FUT	未来	RN	結果名詞形
GEN	属格	Rus.	ロシア語の要素
IMP	命令法	SEQ	継起
INCH	起動	SG	単数
IND	直説法	TR	他動詞

参考文献

Vserossijskaja perepis' naselenija 2010.

http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm

Andrews, Avery D. 2007. Relative clauses. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, second edition, volume II: *Complex Constructions*, 206-236. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W. 2010. Basic *Linguistic Theory*, volume 2: *Grammatical Topic*. Oxford: Oxford University Press.

Dixon, R.M.W. 2012. Basic *Linguistic Theory*, volume 3: *Further Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.

江畑冬生. 2007. 「サハ語（ヤクート語）のクリティック」, 『アジア・アフリカの言語と言語学』第2号, 17-28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎. 2003. 「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか - 対照文法の試み」, アレキサンダー・ボビン／長田俊樹編『日本語系統論の現在』, 249-340. 国際日本文化研究センター.

Keenan, Edward L. 1985. Relative clauses. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, volume II: *Complex Constructions*, 141-170. Cambridge: Cambridge University Press.

König, Ekkehard and Peter Siemund. 2007. Speech act distinctions in grammar. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, second edition, volume I: *Clause Structure*, 276-324. Cambridge: Cambridge University Press.

Krejnovich, E.A. 1900. Jukagirskij jazyk. *Lingvisticheskij entsiklopedicheskij slovar'*, 601-602. Moscow, Sovetskaja entsiklopedija.

Maslova, Elena. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Nikolaeva, I. A. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.

白尚燁. 2011. 「ウデヘ語の疑問詞による相関構文」『北方言語研究』第1号, 101-114. 北海道大学大学院文学研究科.

白尚燁. 2012. 「ツングース諸語のWH相関構文の分布に対する類型的考察」『北方言語研究』第2号, 163-181. 北海道大学大学院文学研究科.

Siemund, Peter. 2001. Interrogative constructions. In Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wolf Oesterreicher, and Wolfgang Raible. (eds.), *Language Typology and Language Universals*, 1010-1028. Berlin: de Gruyter.

津曲敏郎. 1996. 「中国・ロシアのツングース諸語」, 『言語研究』110, 177-191.